

フィールドワークからホームライフへ

—美術専修学生を対象にした地域探索による初年次教育—

From Field Work to Home Life: First Year Experience of Local Research for Students of Art Pedagogy

富田 晃*

Akira TOMITA

要 旨

本稿は、弘前大学の初年次教育の一環である「基礎ゼミ」(対象：教育学部学校教育教員養成課程教科教育専攻美術専修平成26年度入学生)において実施した地域の文化財探索によるフィールドワークを取り入れた授業を紹介するとともに、その意義を学生が記した「振り返り」を通じて確認するものである。学生の能動的参加によるアクティブ・ラーニングが求められる中、学生を学外に連れ出し社会のなかでさまざまな活動をさせるフィールドワークの教育的効果に期待が高まっている。筆者は、フィールドワークに加え対話的鑑賞法やラーニング・ポートフォリオを導入した15回の授業をおこなった。初年次教育におけるフィールドワークとは、学生を、大学とともに地域社会の一員とさせ、そこをホームとしてよりよく生きる、つまりフィールドワークから発してよりよいホームライフを構築していくことが重要なのであり、それこそが問題解決型学習の実践なのである。

キーワード：フィールドワーク、アクティブ・ラーニング、ラーニング・ポートフォリオ、問題解決型学習、初年次教育、対話型鑑賞法

1 序論

1-1 アクティブ・ラーニングとフィールドワーク

文部科学省は2012年の答申において大学教育の質的転換として「主体的に考える力の育成」を掲げた。具体的には、講義中心の授業スタイルから、グループ・ディスカッション、調査学習、問題解決型学習など、学生の能動的参加を求めるアクティブ・ラーニングへの移行を挙げている。アクティブ・ラーニングへの要求が高まる中、学生を学外に連れ出し社会のなかでさまざまな活動をさせるフィールドワークの教育的効果に期待が高まっている。

フィールドワークとは、テーマに即した場所を訪れ、その土地の人々とさまざまな体験を共有しながらおこなう社会調査をいう。フィールドワークは異文化理解を目的とする文化人類学の研究手法として20世紀初頭に確立したが、近年では、なにも本格的な学術調査でなくとも探索、インタビュー、体験などの現地での活動をもってフィールドワークと呼ばれるようになってきており、この広い意味でのフィールドワークが、教育分野を中心に盛んに推奨され、取り入れられるようになってきている。

*弘前大学教育学部
Faculty of Education, Hirosaki University

昨今のフィールドワークの普及は、小学校や中学校の教育においてもみられ、校区内の自然を観察したり文化施設を訪ねたりする、地域探索型のフィールドワークが取り入れられている。特に総合的な学習の時間をはじめ、生活科、社会科、理科では、積極的に教室を出て、豊かな自然や文化的な環境、人々との関わりの中で学習を深めることが奨励されている。教室での授業では知識中心となりがちだが、地域の文化財などを実際に訪れ五感を伴った体験を経ることによって、知性と感性とが高次に融合した豊かな経験を得ることができ、そこから発生する問題意識とその解決への模索が「生きる力」を養うことになるからだ。また、地域社会の人々との交流によって身に着くコミュニケーション力の養成もフィールドワークの重要な教育効果である。

一方、大学受験の準備期間とされがちな高等学校では、受験に直接役立たないフィールドワークは、さほど普及していないのが現状である。

1-2 フィールドワークと問題解決型学習

フィールドワークは、大学教育においてもさまざまな場面に取り入れられている。フィールドワークを取り入れた正課教育は、次の4つに分類できよう。

- 文化人類学、社会学など、フィールドワークそのものが、学問の中核をなす領域の専門教育として
- 教養教育として
- キャリア教育として
- 初年次教育として

文化人類学では、学問発祥の時からフィールドワークそのものが学問の中核をなしており、大学の文化人類学コースでは専攻する学生の必修科目としてフィールドワークを課しているところが多い。学術研究としてのフィールドワークは、無論、調査成果を得ることが目的である。こうしたなか、文化人類学者の原尻英樹は、静岡大学人文学部の授業「民族誌実習」で、学生との約1週間の合宿によるフィールドワークを県内山漁村でおこない、その成果としての学生の教育的効果を次のように挙げている。

- ①学生の社会性の獲得とナルシズムの克服
- ②話し、聞き、答え、書き、読むというコミュニケーションの一般的能力の開発と発展
- ③教師のポテンシャルティエーの開発と発展
- ④地域社会との連携の契機
- ⑤学生間、学生と教師間のより良いコミュニケーションの進展

(原尻, 2005, p.105)

異文化社会を研究する文化人類学のフィールドワークでは、調査者が対象社会の言語や生活習慣から身につけなければならないといった高いハードルがあるとともに、客観的分析者である調査者が対象社会をむやみに変化させてはいけないという考えがある。一方、異文化社会ではなく、自らが属する社会を調査対象とする社会学では、調査者が対象社会の一員として、問題を発見しそれを解決することにより社会に貢献するという視点を含みえる。つまり、フィールドワークにおいて問題解決型学習 (PBL Project-Based Learning) をおこなうのである。

社会学者の川口充勇は、同志社大学社会学部の授業「社会調査実習」においておこなった、地域産業の調査と商品開発を学生とともにおこなった経験からその成果を以下のようにまとめている。

本実習の履修生の多くは、はじめてのフィールドワークを通して、不安感・緊張感→出会い・発見の感動→協力者への感謝→責任感の獲得→主体性の確立という軌跡を経てきた。それは、“社会人一步手前”の彼・彼女たちにとって、「予期的社会化」の軌跡で

あったと換言してもよいだろう。

(河口, 2007, p.78)

このように文化人類学や社会学といったフィールドワークそのものが学問の中核をなす領域の研究者自身が、学術研究としての調査成果のみにフィールドワークの価値を置くのではなく、フィールドワーク自体が豊かな人間性を養うための教育実践であることを指摘している点は意義深い。この教育効果は、大学教養教育の理念である「豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材を育てること」と合致する。こうしたフィールドワークの教養教育的意義から、近年、各大学の教養教育や初年次教育にフィールドワークを取り入れる動きが出てきている。

大学の教養教育にフィールドワークを取り入れている例を見てみよう。山形大学では、全学部、全学年対象の選択教養科目「フィールドワークー共生の森もがみ」において、県内過疎地域で1泊2日を2回行う現地体験学習を中核とする授業を行っており、その成果を次のように挙げている。

学生は体験学習というインパクトにより、地域の諸課題やすばらしさという対象世界との対話、自分自身の故郷や大学生の自分の在り方という自己との対話、そして他学生や地域住民という他者との対話を行いながら、それぞれとの関係性を作りだし、作り直している様子が伺われた。(中略)さらに、本授業は学生にとってのメリットだけでなく、地域・地域住民にとっても大きなメリットをもたらしていた。学生が地域の活動に参加することで、地域住民の元気、生き甲斐、交流を生み出し、地域の魅力を新たに発見することのきっかけとなっているのである。

(杉原, 2010, p.18)

現在、地方国立大学を中心に、大学の地域社会への貢献と連携が強く求められている。こうしたなか、学生への教育的効果のみならず、学生から受ける刺激による地域社会の活性化にまで大学教育におけるフィールドワークの効果があることの意義は大きい。

1-3 初年次教育におけるフィールドワーク

高大接続が唱えられるなか、高校までの受動的な学習から、大学で求められる自律的・能動的な学習への円滑な移行のためのプログラム「初年次教育」が、ここ十数年の間に一気に普及し、現在ではほとんどの大学で実施されるようになってきている。

初年次教育の内容は「大学生としての生活・学習習慣について」「大学施設の利用法」「レポートの書き方などのスタディスキル」「コンピューターなどの情報リテラシー」「将来の職業に関するキャリア教育」「専門教育への導入」などと多岐にわたる。初年次教育の目的を一言でいえば「大学生になる」ことをサポートすることといえる。

新入生の中には、進学を機にそれまで生まれ育った地域を離れ新たな地域で暮らし始める者も多い。こうした他地域からやってきた新入生にとって、大学入学は、「大学生になること」とともに大学のあたる「新たな地域社会の一員になる」ことでもある。一方、入学以前から大学のある地域に暮らしていた新入生にとっては、以前から大学のある地域になじみがある一方、実はさほど地域社会とかかわりをもっていなかったり、他地域との比較のもと相対的に地域の特色を把握したことがなかったりする学生が多い。大学とは、学生にとって、勉学の場であるとともに、社会人になるための準備の場でもある。つまり、初年次教育では新入生を大学とともに社会になじませる必要があり、その意味で、大学のある地域を対象としたフィールドワークを初年次教育に取り入れる意義がある。

1-4 美術教育におけるフィールドワーク

フィールドワークは、その学問の中心的営みである文化人類学や社会学ばかりでなく、地理学、心理学、教育学などさまざまな学問分野において活用されている。では、美術教育において、フィールドワークをいかに活用することができるのだろうか。本論が対象とする教育学部学校教育教員養成課程美術専修すなわち学校の美術教師になることをめざして入学した大学1年生への教育を考えると、先に挙げた

- 専門分野を超えて豊かな人間性の養う教養教育
- 大学教育の導入としての初年次教育

に加えて、

- 教員養成としての教職教育
- 専門分野としての美術

の観点から考察する必要がある。

教職教育におけるフィールドとは、まず第一に学校を指すことは間違いない。そういった意味では、教職課程には教育実習というフィールドワークがすでに制度化されており、その必要性和重要性はすでに認知されている。

専門分野としての美術におけるフィールドワークとはどのようなものだろうか。企画者、製作者、ボランティアなどとして、美術の創作活動のコミュニティーに直接参加するタイプのものと、直接的には創作活動に参加せず鑑賞者などとして美術にかかわるタイプのものに分けられるであろう。フィールドワークが学問として体系化された文化人類学におけるフィールドワークは、研究のために対象社会に参加し、人々と話しをしたり、生活をともにしたりすることは求められても、対象社会の一員になることは戒められている。こうした学術研究としてのフィールドワークと照らし合わせるならば、美術におけるフィールドワークとは、創作活動に直接参加するのではなく、鑑賞者の立場から、美術作品のある場所を実際に訪れ作品をじかに観賞するとともに、それを作り出す人、保存・補修する人、鑑賞する人、販売・購入する人たちなど、その作品とかかわる人たちに会い、話を聞いたり、ともに活動したりしながら、実際の社会文脈のなかで対象の価値や意味、問題点などをとらえること、となる。つまり美術のフィールドワークとは、美術をめぐる人と人とのつながりを読み解くことにより美術の社会的側面について考察することなのだ。

1-5 美術の専門導入としての対話的鑑賞法

対話的鑑賞法とは、対話を通じて美術作品などを読み解いていく鑑賞法である。1980年代にニューヨーク近代美術館で生まれた。近年、日本においても注目されるようになり、美術館や学校のほか医療や福祉においても導入が進んでいる。対話的鑑賞法を受けるにあたって美術の専門的知識や技能は必要ない。じっくり作品を見て思い浮かんだことを話し他の人の意見もきいて再び作品をみる、の繰り返しをおこなうことにより同じ対象を見ていながら様々な異なった事が思い浮かんだり、作品の表情が変化したりするように感じられる。対話的鑑賞法により、自分で考える力、他者とコミュニケーションをとる力、イメージの中に意味を見出す力、が引き出されるとされている。

このように人間力の養成という意味から対話的鑑賞法は教養教育の教材に適しているといえる。また、対話的鑑賞法が、互いのことを理解し合う場となることから、新たなクラスメイトと学びの共同体をつくる初年次教育の教材にも適しているといえよう。そして初年次教育の目的の一つに「専門教育への導入」がある。対話的鑑賞法によって、美術が人々の心に働きかける力を実感として感じ取ることができ、美術への興味関心を深めることができる。つまり、対話的鑑賞法は、美術を学び出そうとする新入生の専門教育への導入教材としても適しているのである。

1-6 プレゼンテーションとレポート作成

高校時代はほとんど課せられないのに大学に入学すると、いきなり学生課題の中心になるのがプレゼンテーションとレポートや論文の作成である。それは、高校教育の中心が、暗記を中心とした知識の獲得であるのに対し、大学教育の中心は、知識の理性的な応用である知性の獲得とその表現が中心となるからである。そして知性を磨き伝える方法としてビジュアル資料などをつかった口頭でのプレゼンテーションや論理的で整合性のある文章の作成が有効だからだ。大学の初年次教育に盛り込まれるべき内容として「レポートの書き方」や「プレゼンテーションの方法」が挙げられているが、それは単にスキルの獲得が目的なのではなく、知性を磨き、伝えることができるようになることが大切なのである。

1-7 ラーニング・ポートフォリオ

学習に関わる下調べ、資料、振り返りなどといった学びの記録をひとまとめにして一覧できるようにしたものをラーニング・ポートフォリオという。ラーニング・ポートフォリオを用いることの効果は、学生が自らの学習プロセスを把握することができ、能動的な学習活動をするようになることや、これまで試験やレポートといった最終到達点だけでおこなわれがちだった評価に対し各回の授業の準備や振り返りといった学びの過程を評価対象にできることなどにあるとされる。近年、初年次教育、アクティブ・ラーニングとともに、ラーニング・ポートフォリオは各大学に普及しつつある。

また、小集団において「学びの共同体」が生まれ、協同的な相互作用があるとき学習効果は向上する。ラーニング・ポートフォリオにおいては、自分のラーニング・ポートフォリオだけでなく、グループの各メンバーのラーニング・ポートフォリオを互いに読み合えるようにすると、気付きや発見などが「学びの共同体」で共有され、学びの相乗効果が生まれる。

2 授業実践

2-1 授業計画「弘前発見」

平成26年度前期、弘前大学の教養教育で開講された導入科目「基礎ゼミ」において教育学部学校教育教員養成課程美術専修の1年生8人を筆者が担当した。

「基礎ゼミ」は、弘前大学の初年次教育の一環として新入生全てを対象とし、学部・学科・課程等に分かれて行われる。シラバスは全学共通で、授業概要として「少人数のゼミナール方式によって、高校までとは異なる、大学における自主的な勉強方法について学びます。また、安全で健康的な学生生活を送るための基礎知識についても学習します。担当教員の説明を一方的に聞くのではなく、受講するみなさんの積極的な授業活動や、課外学習が中心となります。そして、自らの学習記録（ラーニング・ポートフォリオ）を作成します。」と記され、また、「到達目標」として「①自主的な学習態度を獲得すること ②課題発見能力を高めること ③資料（情報）の検索・収集・整理に関する基本的な技能を習得すること ④基本的な文章構成力・発表能力・討論能力などを獲得すること ⑤学生と担当教員及び学生相互において、自分の意見を伝えられる基礎的なコミュニケーション能力を獲得すること ⑥安全で健康的な学生生活を送るための基礎知識を習得すること」が挙げられている。

筆者は、大学が定めた上記の方針に加え、対象が美術教師をめざす学生であること、初年次教育が大学生生活への導入であるとともに、地域社会の一員になることへの導入であることを考慮して、具体的内容を、地域の文化財などを探索するフィールドワークを中心に据えたものとした。また、美術の専門教育への導入として美術作品の対話的鑑賞を数回にわたりおこなうことにした。

青森県弘前市は、人口約18万人の地方都市である。城下町として発達し、津軽地方の中心都市として約400年の歴史をもつ。明治期になると、第八師団や旧制高校が設置され軍都、学都となった。また戦災を免れたこともあり、江戸時代の弘前城や明治時代の洋館など、数多くの歴史的文化的文化財が残されてい

る。本授業では、こうした弘前の歴史的・文化的背景のもと、「弘前発見」と題し、有名な観光ポイントはあえて外し、知る人ぞ知る的な文化財や文化施設を探索することにした。移動方法は、基本徒歩とした。歩くことによって、単に目的地だけでなく、途中で出会う風景や街並、人の暮らしなどを感じとって欲しかったのである。

学生には、各担当のもと探索地に関する事前の下調べをさせ、探索当日、現場で口頭発表させることとした。また、ラーニング・ポートフォリオとしてクリアファイルを配布し、毎回の授業の後に「振り返り」として「やったこと、学んだこと」をA4用紙1枚にフリーハンドで記入させ、回収後、コピーして配布し、各回授業の資料とともにファイルに納めさせることとした。

2-2 各回の授業について

以下、各回の授業の概要を紹介するとともに、学生が記した「振り返り」を通じて、その意義を確認する。

1回目（4月14日）

場所：講義室・図書館

学生・教員の簡単な自己紹介が終わると、一人の学生が意を決したように「基礎ゼミって何するんですか？」と質問があり、筆者が「散歩」と応えると、学生たちは一様に驚いたような顔をしていた。そして本授業のテーマ「弘前発見」を伝え、文化財等がのった弘前市の地図を配布した。

授業中盤の職員による図書館ガイダンスにあわせ学生を館内の「津軽学コーナー」に案内し、これから探索する各文化財等に関わる文献を紹介した。

授業後半、講義室にもどり、地図で今後探索する場所を確認し、それぞれの概要を紹介した。そして探索当日現場において下調べの成果を発表する担当者を決めた。最後に「振り返り」としてA4用紙に「授業でやったこと、感じたこと」を記させた。「弘前を散歩しながら美術に関するところを訪れ、何かを感じるという授業。とてもワクワクしています」（学生B）、といった感想がかかれていた。

2回目（4月21日）

場所：弘前大学資料館・講義室

先週の「振り返り」のコピーを配布し、各メンバーの「振り返り」に目を通させながらクリアファイルに納めさせた後、大学資料館を訪れた。資料館では常設展である大学および各学部の歴史資料に加え、企画展示室の筆者の写真展「いのり」を見せた。「振り返り」には「自分たちが忘れかけていることを再び思い出させるものだった。マッチの光の効果で、写真に映されたものが単なる事実というだけでなく、感情に訴えかけるものとなっていた。」（学生E）とあった。また、常設展示されている故・村上善男のアッサンブラージュ作品をもちいて対話的鑑賞法をおこなった。

授業後半は講義室にて事前調査の仕方について指導した。文献調査、ネット検索とともに、発表者は必ず事前に現場を訪れることとした。

3回目（4月28日）

探索地：弘前市旧図書館／青森銀行記念館

共に堀江佐吉による明治の疑洋風建築である。徒歩30分の行程では、城下町特有の町並みや町名を解説したりしながら進んだ。「振り返り」には「歩いていくのは疲れそうでいやだった。でも、ところどころ解説してくれたり、あまり通らないような小道を進んだりしたおかげで、飽きることなく楽しくいった」（学生F）とあった。途中、現在の市図書館の郷土資料室を案内した。探索地では、自由見学の後、教員である筆者が後の学生の模範となるように事前調査の成果を発表した。「振り返り」には「弘

前で生まれ育った私にとって、あまりにも普通に街の中にあり、気にもとめてなかったものが、とても貴重でとてもいいものだったんだと知った。自分は勝手に弘前は何もない街と思い込んでいたが、それは間違っていたようだ。」(学生H)とあった。

4回(5月7日)

探索地：最勝院／袋宮寺

巨大な木彫の十一面観世音菩薩を有する袋宮寺と日本最北の五重塔を有する最勝院という江戸初期の寺院を訪ねた。初の学生発表の日であった。担当学生は「振り返り」に「事前に現地について観音像を見たとき、本当に圧倒された。こんなに大きな立派な像が弘前にあることに驚いた。図書館について資料を調べたけど、あまり、うまくみんなを案内できなくて、心残りだった。でも、みんなの感想を聞いて、また調べなければならぬことが発見できた。次の発表はもっと頑張ります。」(学生A)と記していた。

5回(5月12日)

探索地：吉井酒造煉瓦倉庫／弘前昇天教会

途中に夏祭りの山車をつくる「ねぶた小屋」があった。筆者がねぶたについて学生に話していると内部に案内され製作風景を見学した。「振り返り」にある学生は「こんなに身近に作っている人たちがいてねぶたを身近に感じられるようになり嬉しかった」と記していた。

吉井倉庫は個人所有の巨大なレンガ倉庫で、2001、2002、2006年に現代美術家の奈良美智の展覧会が行われた。発表担当の学生は「振り返り」に「初めての発表で緊張しました。吉井倉庫や奈良美智について何を調べればいいのか、どう伝えればいいのか、考えるときりがなかったけれど、自分なりの考えをまとめて発表することができて達成感を得られました。次の発表に向けて、同時代の他の美術家や作品や市民がつくった他の展覧会について調べてみようとおもいます」と記していた。

弘前昇天教会は、大正期につくられた英国国教会系の教会である。レンガづくりである一方で内部は襖で仕切られているという和洋折衷の洋風建築である。この日は、奈良美智展の実行委員であり昇天教会の教会員である市民の方に案内をお願いした。

6回(5月19日)

探索地：田中屋(漆器店)

弘前は藩政時代から漆芸がさかんで、現在では津軽塗として国の伝統的工芸品に指定されている。田中屋は津軽塗の老店の一つで店舗、工房、資料館、ギャラリー、カフェを併設している。また、元弘前大学教授であり現代美術家の故・村上善男が空間をプロデュースしており、彼の作品の数々も展示されている。「津軽塗」と「村上善男」にテーマを分けて二人の学生が発表した。また、案内・コメント役を田中久元社長にお願いした。

村上善男について発表した学生は、事前調査で市図書館に行き『村上善男ノート』をみつけ、そこに記された語録をとりあげることにより、村上氏の人となりや伝えた。村上氏を敬服し親交していた田中氏が、村上氏亡き後彼の言葉をまとめて出版し市の図書館に寄贈した一冊を発表者がとりあげたのである。田中氏は、学生の発表にとっても感動したようであった。

7回(5月26日)

探索地：弘前こぎん研究所(前川國男プチ博物館)

こぎん(こぎん刺し)とは、津軽地方に伝わる刺し子の技法で江戸時代に農民の野良着として発達した。こぎんの普及、制作、販売を行っている。所長の案内により製作過程や作品を見学した。ある学生

は「振り返り」に「恥ずかしながら、私は青森出身なのに、これまでごぎんを知りませんでした。ごぎんを見て、歴史の話をきいてとても勉強になった。伝統を残すためには、時代のニーズに合わせてともに、『これは譲れない』という頑固さもまた大切なのだと思った。」(学生B)と記していた。

建物は、日本近代建築の祖である前川國男の処女作であり2階は「前川國男プチ博物館」となっている。

8回(6月2日)

探索地：弘前市斎場

自転車で向かった。弘前市斎場は、前川國男の最晩年の作品で、彼の処女作である木村産業研究所(現：弘前ごぎん研究所)のほか市役所、市民会館、博物館、市立病院など数々の前川建築が弘前市内に現存している。斎場という場所は公的な場所でありながら特別な機会にしか行くことがなく、ましてや観光で訪れるような所ではないが、弘前市斎場は、建築作品としての価値から時間を限って一般の見学を認めている。「振り返り」にある学生は「建物の中の角の丸み、スペースの使い方、照明の付け方、窓の位置など、一つ一つがとてもモダンであると同時に、神聖な場所としての深み、重み、尊厳がとても大切にされた神秘的な空間だった。発表者の話から『黄泉の国』『俗世』と二つの世界をつなぐ『よもつひらさか』というストーリー性をもって設計されていることを知って驚いた。その場所が使われれば使われるだけ建物が『生きる』ような不思議さがあるように感じた。」と記していた。

自転車ということもあり、斎場のあと栄螺堂(江戸期の八角二重円堂)、蘭庭園の襖絵を見学し、津軽三味線の稽古場で演奏を聴いた。

9回(6月9日)

前半は、筆者の写真作品「いのり」を題材に大学院生がファシリテーターとなって対話的鑑賞法をおこなった。「振り返り」にある学生は「(院生が)話術で皆の感想を聞き出してくれたので自分が受けた印象とはまた別のものを感じることができた。自分もそのようなことができる教師になりたい。」(学生E)、「進行した先生の話のふり方がうまく、ひとりひとりの感想を聞いたあとに完結にまとめて、解釈しやすくしてくれたので、他の人の感想や意見が自分の中でうまく整理できた。自分も教師を目指しているので、話の聞き方、問いかけ方、授業の進め方など、学ぶべきことが多いと思った。」(学生F)と記していた。

後半は、後の研究発表に向けて、比較や抽象化によって対象化することを目指し、その糧となる文献検索の指導をおこなった。

10回(6月16日)

探索地：スペース・デネガ

弘前市街にある民間のレンタル・スペースにいった。学生、教員ともに弘前の美術関係者がこのスペースで幾多の展覧会を開催してきた。美術を専攻する1年生にしてみれば、いずれ、己の作品を展示することになるかもしれないところである。余分なものを剥ぎ落した建築で、施主であるオーナーと建築家により生まれたこだわりの空間である。担当した学生は、第6回の田中屋社長と学生とのやりとりに影響されたようで、事前に何回か現場にいき、オーナーから話をうかがっていた。その学生は「振り返り」に、「創設者のこと、建築家のこと、二人の出会い、二人のこだわり、そしてそのこだわりを守る人、他にここまで自由な展示スペースはあるのだろうか。調べて良かった。本当に有意義だった。」(学生H)と記している。また他の学生は「自分もいつかこんなところで作品の展示ができれば幸せだろうなと思いました。今度何かの展示会でまた来たいです。」(学生A)と記していた。

11回（6月23日）

院生をファシリテーターとし、画家・山下菊二の「あけぼの村物語」を題材に対話的鑑賞法をおこなった。学生の「振り返り」には「ぱっと見ただけでは何を表現しているのか全くわかりませんでした。しかし、みんなで意見を話し合っていると、その『何』の部分が徐々に明らかになっていく感覚がすごく新鮮で楽しかったです。そして、この絵の本当の意味を説明していただいた後、改めて絵を見たら最初と全く違う絵に見えて驚きました。」(学生B)や「前回の鑑賞の授業も合わせ、ある作品を時間をかけてじっくり見て一人一人が感じたことを話し合うことは、自分とは違う考えや見方を発見することになり、とても面白いと感じた。」(学生F)と記していた。

後半は、「問いを立てる」と題し、研究発表にむけ、各学生の研究テーマについて個別指導をおこなった。

12・13・14回（6月30日 7月7・14日）

研究発表会をおこなった。

一人：発表15分、質疑応答およびコメント：10分

以下、タイトルと「問い」である

学生A「最勝院五重塔：建築物としての特徴」

最勝院五重塔を他の五重塔や世界の仏塔と比較しながらその特徴を明らかにする。

学生B「奈良美智とは」

1990年代から現在まで活躍している現代美術のアーティストを比較することにより、奈良美智の特徴を知る。

学生C「和洋折衷の時代背景」

弘前昇天教会の歴史をひもとくことにより、なぜ和の要素をとりこんだキリスト教会となったか考察する。

学生D「漆芸と津軽塗」

津軽塗への理解を深めるため、まず広く漆芸について学び、他の産地との比較のなかで津軽塗の特徴を考える。

学生E「村上善男」

村上善男の作風は、どのような影響を受けて変化し、そして確立していったのかを明らかにする。

学生F「こぎん刺しの特徴」

津軽のこぎん刺しをアジア各地の伝統的な刺繍との比較のなかで捉え、その特徴を明らかにする。

学生G「モダニズム建築への移行：近代化と白い箱」

前川國男に関連し、モダニズム建築の成立、特徴、近代化がもたらした日本建築の変化について明らかにする。

学生H「芸術と建築：作品展示との関係から」

アーティストが作る芸術作品とそれらを展示するために作られた建築物との間に起こる問題を明らかにする。

15回（7月28日）

事前に提出させた各学生の最終レポートに関し、教員である筆者が「評価すべき点」と「改善すべき点」をとりあげてコメントをおこなった。また「基礎ゼミ」全体をとおしての「振り返り」を記させた。

2-3 全体の「振り返り」から

全体の「振り返り」からいくつか抜粋する。

自分が発表した回のみみんなの感想を読んで、自分が伝えたいことが伝わっていてホットするとともに、でも、なぜ、奈良美智はああいう作風になったのかという、疑問が書かれていて、それが、最終発表にむけてより深く奈良について調べたり考えたりする原動力になりました。今回の基礎ゼミを通じて学んだことは一つのことを探求する面白さです。以前は「レポートなんて」と思っていたのですが、今は、何かを調べて、考えて、レポートに書くことが好きになりました。(学生B)

基礎ゼミを通じて弘前のことを少しだけ深く知れたと思う。このようなきっかけがなければ、普段の生活ではなかなか見れない、知れない、聞けないことばかりだった。そしてマニアックなことを知れば知るほど、そして知ろうとするほど色々な人とのつながりが生まれて、さらに違ったことにまで興味が湧いて…という良いサイクルのなかに自分が巻き込まれていくのが嬉しかった。(学生E)

私は、この数ヶ月で弘前を通じて美術の新たな側面を知ったり、元々の知識を深めたり、視野を広げたり、発想の幅を広げることができました。美術といえば絵画ぐらいしか思い浮かべていなかったけど、テーマにそって弘前の街を歩くことによって、伝統工芸や建築物や街並みまでもが美術に入るものだと思うようになった。以前は、壊れないように計算された建築物がなぜ美術と結びつくのか全く分かってなかったが、教会へ行き、斎場に行き、利用する人の気持ちを思い、美しさを求め、それに成功させた建築物を目のあたりにして、建築が美術とつながっていたことがとても深いところで実感できた。(学生G)

3 フィールドワークからホームライフへ

以上、本稿は、美術教師になることをめざして入学した大学1年生の初年次教育として地域の文化財探索のフィールドワーク、対話的鑑賞法、プレゼンテーション、レポート作成、ラーニング・ポートフォリオなどを取り入れた授業を紹介した。その成果は、前項で紹介した学生の「振り返り」とともに、「この授業で得たものは、自分が思っていたものより、ずっと多かった。そして今、自分が思っているよりも、これから、ずっと大きくなっていくのだろう」(学生C)という言葉に表されている。

初年次教育の目的は、新入生が「大学生になる」ことをサポートすることとされ、アクティブ・ラーニングの目玉として大学を出て地域社会で活動を行うフィールドワークが注目されている。

フィールドワークという言葉には、「拠点（ホーム）」に対する「現場」といった概念を「フィールド」に、生きること全てである「生活（ライフ）」に対し、生きることの一部である「活動」という概念が「ワーク」に投影されている。つまり、大学教育にフィールドワークが推奨されるということは、大学こそが学生が生きる拠点であり、地域社会は学生が活動をする現場にすぎないとして両者を切り離す視点があるのだ。このように地域社会を大学から切り離された場としてとらえるのではなく、大学も地域社会の一部なのであり、フィールドワークを通じて、学生が、地域社会の一員となり、その中でよりよい社会と生活を築いてゆくことが大切なのだ。つまり、初年次教育で行うフィールドワークとは、学生を、大学とともに地域社会の一員とさせ、それをホームとしてよりよく生きる、つまりフィールド

ワークを通じてホームライフを構築していくことが重要な目的なのであり、それこそが問題解決型学習の実践なのである。

文献

- 河口充勇, 2007, 「フィールドワークの教育効果」『同志社社会学研究』, 11, 同志社大学社会学部
 原尻英樹, 2005, 「フィールドワーク教育の実践とその教育的効果」『人文論集』56/1, 静岡大学人文学部
 杉原真晃, 2010, 「フィールドワークを評価する: 「フィールドワーカー共生の森もがみ」の3年間の総括」
 『山形大学高等教育研究年報』



〈地図〉 探索をおこなった弘前市内の文化財・文化施設